

立入廣太郎先生記念号によせて

立入廣太郎先生は一九八一年三月をもって立教大学を定年退職されました。先生は一九三九年三月に立教大学経済学部を卒業されるとたちちに経済学部助手に任せられ、爾来、三年間の中断があつたものの、実に三九年の長きにわたつて経済学部の教学の發展を支えてこられました。これは実質的に経済学部五〇年の歴史にほぼ相当する永い年月であります。

先生は経済学部において日本経済史、日本資本主義發達史の講義を担当されるかたわら、経済学概論、外書講読、ゼミナールなどの講義、研究指導を通じて、きわめて多くの学生たちの教育に専心されました。学生たちは教場の内外でその温和にして高潔な人格につよい感銘をうけ、いまだに先生を慕つて集う者きわめて多くを数えます。

先生はたんに温厚篤実な人格者として学生に慕われていただけではありません。学内、学部内のさまざまな問題にたいする先生の的確にして正鵠をえた判断と主張とは、その謙虚な人柄とあいまって、教授会においても欠かすことのできない存在としてひととき重きをなしてこられました。一九六三年より二年間経済学科長をつとめられ、一九六九年ようやく本学でもその兆しのみえはじめた大学紛争というもつとも困難な時期に経済学部長としてその解決に努力され、教授会の期待を一身に担われたことがそれを物語っております。先生は連日の激務に健康を害され、惜しくもその任期を全うすることなく病に倒れましたが、教育者としての信念に終始貫かれた先生のゆるがぬ姿勢はわ

れわれに大きなげましとなりました。

先生は戦後間もなく創設された「持株会社整理委員会」において財閥解体作業に深くかかわった経験を基礎に、財閥を日本資本主義の構造的特質の凝集点としてとらえるという独自の視角を提唱されました。これは戦後の一連の財閥研究にさきがけた指摘であって、その学術的意義は小さくないとかがっております。先生は一貫して財閥の形成、発展、解体、そして再編の全過程の統一的把握を課題として追求されております。収集された多くの貴重な資料とそれをふまえた該博な学識とによって、先生は大学院経済学研究科における日本近・現代経済史研究に参加する多数の院生の指導にあたり、そのなかから本学をはじめ諸大学で研究・教育に従事する若い研究者たちが数多く巣立っていきました。

経済学部的发展とひいては本学の隆盛にたいして貢献された先生の教育上の功績はまことに大きいものがあると認め、一九八一年九月、立教大学は先生に名誉教授の称号を贈りました。

いま、先生の定年退職を迎え、経済学部の発展にたいしてなされた先生の御貢献をながく記念するため、本号をもって先生の記念号といたします。これからも先生がますますお元気で御活躍されることを希い、これまでと渝らぬ御尽力を経済学部のために賜りますようお願いしております。

一九八二年一月

経済学部長 山田耕之介